



図工のお悩み相談室

ウェブサイトのお悩み相談室では随時、お悩み受付中です。

図工の悩みを
誰にも相談できず、
モヤモヤしている

YES

NO

教科書を
もっと活用したい

YES

活動中の子どもに声を
かけるタイミングが
分からない

ともになでる図工室



生活の中の
形や色って
何だろう

YES

図工のあるまち



もっと深く
図工を知りたい!

NO

(次号へ)

使ってみよう! ずがこうさくの教科書



図工がもっと好きになる

日文のお役立ち資料

図工のお悩み 相談室

No. 1

今回のお悩み
「絵に表す活動」での指導について

—— 回答者 ——

- 林 耕史 先生
- 南 育子 先生
- 辻 政博 先生
- 西村徳行 先生

(掲載順)

図工のお悩み相談室 No.01

日文 教授用資料

令和3年(2021年)1月20日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33534

デザイン・イラストレーション:やまねりょうこ(ゆかい)

日本文教出版 株式会社 <https://www.nichibun-g.co.jp/>

- 大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
- 東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
- 九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
- 東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
- 北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ!

日文 検索



本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

『図工のお悩み相談室』は、
悩める先生が自分なりの解決の糸口を見付けられるように、
ベテラン先生と共に考えていく場です。

今回のお悩みテーマは「絵に表す活動」での指導についてです。
絵がへたと気後れする先生も、
かかない子どもや真似ばかりする子どもに
どんな声をかけていいかわからず戸惑う先生も、
回答を読みながら
「どうすれば上手に絵をかかせられるか」ということではなく
「どうすれば子どもが自分の思いを絵に表していけるか」について
一緒に考えていきましょう。

『図工のお悩み相談室』では、
今後も定期的に「評価」「鑑賞」など
図工ならではのテーマを取り上げます。
日本文教出版は子どもに寄り添う図工の授業を、
先生と共に考えていきます。

※本冊子は日文ウェブサイト「図工のお悩み相談室」の内容を
一部修正のうえ、掲載しています。

先生からひと言 回答者紹介



群馬大学
教授
林 耕史 先生

今、僕が興味をもっていることは
“Lost in translation”ということです



帝京大学
教授
辻 政博 先生

Like a Rolling Stone



墨田区立業平小学校
指導教諭
南 育子 先生

迷走したときは、猫の哲学に学び、
植物の生長に足を止め、呼吸を整え考える



東京学芸大学
准教授
西村徳行 先生

「みかたをかえる」は、
いまを楽しく過ごすアイデアです



自分が絵がへたなのに、
図工の授業で子どもに教える自信がありません。

図工は「絵をかく」ための教科ではありません。
むしろ絵が苦手な人の方が子どもの悩みに寄り添えると思います。

林 耕史



私は大学で教員養成の仕事に携わっていて、講義では
必ず学生に「図画工作は絵をかくためにある教科では
ない」と伝えています。学生は一様に「えっ？」と驚
いた表情をします。みんな、「絵をかくことを教わる教
科」だと思っているのですね。

けれども、図画工作はそういう教科ではありません。「絵
をかく（あるいは立体や工作に表す、鑑賞する）活動
を通して、子ども（人）を育てる教科」なのです。

ですから、**指導する上で大切なのは「絵をかく方法」
を教えることではなく、自ら考えることを促したり、
悩みに耳を傾けたり、一緒に楽しみながら試行錯誤す
る姿を大いに認め応援することです。**このとき、「絵
が上手」な教師は「絵を教えて」しまいがちですから、
むしろ「絵が苦手」な人の方が、親身になって子ども
の悩みや思いに寄り添うことができると思います。

私が考えている図画工作の時間を通して育てたい子ど

も像は、「自分で意味を見付け、試行錯誤しながら、自
分なりの方法で表現を追求し、自分の思いを実現でき
る子ども」です。このような姿を応援できる方なら、
素晴らしい先生だと思います。

念のため申し添えますが、「絵が苦手」でも構いません。
けれど、「よい絵」とはどんなものか、どんな姿が見ら
れれば「豊かな表現」といえるのかについては、共に
見識を深めていかなければならないと思います。実は、
こちらの「問い」の方が皆さんに大いにお考えいただ
きたいものなのです。





かきたいものが思い付かない子どもには
どう手助けしたらよいですか。

何も始めない子どもには、それぞれ「何も始めない」理由があるはずです。
子どもの様子を観察してから、慌てず声をかけましょう。

南育子



まず「待つ」ことが大切です。「待つ」というのは、「かきたいものややりたいことが思い付かないように見える子どもが、どのような状態にいるのかを見極める」ということです。

- ①今考えているので、もう少し時間がほしい子ども
- ②先生の話が理解できず、困っている子ども
- ③どうしたらよいのか何も思い付かず固まっている子ども

このような子どもがいたら、「どうしたの？困ったことない？」と声をかけてみましょう。

①の子どもは、「今、考えているの」と答えてくれるはずですから、ゆっくり考える時間があることを示し、安心させてあげましょう。

②の子どもには、周りの子どもの活動を見せながら、一つ一つ内容を確認し、説明します。

③の子どもには、まずは材料や用具を手にとって、どんなことができるのか試してみることを勧めてください。それでも思いとどまっている子どもには、自分で表現し始めるまで、コラボレーションしてみてください。まず先生が画用紙に絵の具を一色ポンツとのせ、次に子どもが好きな色をのせます。このとき、「画用紙の上に生まれた色合いをよく見て次の色を選ぼうね」と子どもと共有することが大切です。2、3回繰り返すとだんだんこだわりをもって色を選んだり、形に注目したりし始めます。こうなったら、もう一人で大丈夫です。

子どもが自ら活動を始めることができたら、子どもを見守り、自分で乗り越えたことを子どもに伝えてください。その一言で、子どもは自信をつけていきます。



風景画では、遠近法などの特定の表現技法を
活動前に教えた方がよいですか。

子どもの表現には、遠近法的ではない表し方がたくさんあります。

辻政博



多くの場合、特定の表現技法を最初に提示するのは、あまりよい方法ではありません。なぜなら、教師の示したことがモデル（お手本）となって、子どもがそれをコピーするだけの活動になってしまう場合もあるからです。子どもが自分の思いを広げ、表し方を工夫し追求する方向に活動が展開していくように導入を行うことが大切です。

この種の題材は、はじめに強く教え込んでしまうと、「遠近法を使ってかくこと」自体が活動の目標になってしまいます。まずは、子ども自身が、自分の生活する身の回りの風景に興味をもち、表したいことを見付けるところから始めたいものです。子どもの表現には、遠近法的ではない表し方が多くあります。ですから、**子どもが、自分の思いに合わせて様々な自分の表し方を工夫できることが大切です。**

一方で、「奥行き」に興味を芽生え、奥行きを表現する方法を知りたいと思う子どもが出てきた場合には、教師が情報を提供してもよいでしょう。個々の子どもの実態や要望に応じて、アドバイスしてはいかがでしょう。





友だちの真似ばかりする子に、
主体的な学びをするように促したいのですが。

真似することはそれ自体、主体的な学びであるといえます。
真似の中にある小さな表現の違いに気付かせ、それを誉めることです。

西村徳行



友だち同士、楽しそうにかいているので、どんな絵をかいているのか楽しみにのぞいてみると、そこにはほぼ同じ構図の絵が！図工は一人一人の表現を大切にしている教科ですから、思わず「一人でかきなさい！」と言いたいところですが、なぜその子たちが同じような絵をかいているのか、考えたことはありますか？

子どもたちは、「すごい」と思える友だちの表現を追体験することで、表現の喜びを味わっているのです。「学ぶ」という言葉の語源は「真似ぶ」、つまり真似をすることだといわれています。**お手本となる友だちの表し方を観察し、実際に自分でやってみて、そのお手本に近付けるよう努力しているのです。**「真似」はそれ自体、主体的な学びであるといえます。

しかし図工の授業ですから、やはり一人一人が自分なりの表現に取り組むことは大切にしたいものです。そ

のためには、子どもの「真似」したい気持ちを大切にしながらも、その子なりの表現につながっていくことが大切です。

そこで教師が心がけたいことは、同じような表現の中にもあるそれぞれの「違い」に気付かせ、それを誉めることです。**同じようにかいていても、そこには小さな表現の違いがあります。教師は言葉がけなどを通して子ども自身からそれを引き出し、違いに気付いたことを誉めるのです。**そうすることで、子どもは「真似ることの次に表れる「自らかく」ことの楽しさに、きっと気付いてくれると思います。



絵の題材では、表す対象やテーマを
ある程度限定した方がよいのでしょうか。

子どもの発想や表し方の広がり保証されることが大切です。

辻政博



テーマや表し方を限定することで、活動の広がりや多様性が生まれる場合もあります。限定された中で自分なりの表現を追求する経験と、テーマや表し方を自分で自由に選択する経験との、両方を積み重ねることで、子どもの創造性が高まっていきます。

例えば、自分たちが丹精込めて育てた「ひまわり」を絵に表すことは、自然な動機に基づいています。同じテーマでも個々の子どもの思いや表し方が異なってくるでしょう。けれども、教師が一方向的に「今日はひまわりをかきます」と決めてかき方を教えるという授業は、テーマと子どもの動機との間にずれが生じてしまいます。

また、描画材などの材料を限定して活動することも考えられます。描画材の特性によって、そこに表現される形や色やイメージが異なってくるでしょう。

大切なのは、「限定することで、子どもの発想や表し方の広がり保証されること」です。また、子ども自身が、テーマや表現方法を選択する経験も、子どもの成長には必要です。**限定された中で活動すること、自由に選択して活動すること、双方の経験を積み重ねることが、やがては自分でテーマを決め、自分なりの表し方ができる力を身に付けることにつながっていくでしょう。**

